

全林研会長賞

愛媛県

美川地区林研グループ協議会

所在地 > 愛媛県上浮穴郡久万高原町

設立 > 昭和55年6月1日

会員 > 男17人

年齢 > 43歳～77歳 平均65歳

主なプロジェクト

- ◆ 育林技術の研鑽・伝承
- ◆ 集団間伐の推進
- ◆ 児童・生徒への森林教室の実施

1. はじめに

日本一の水質を誇る仁淀川の源流の一つである面河川と久万川が合流する久万高原町美川地区は、民有林面積約4万3,000ha、人工林率86%にも達する久万林業地のほぼ中央部に位置します。この合流部には御三戸嶽、通称軍艦岩と呼ばれている高さ37mの大岩が地区のシンボルとしてそびえています。

平成16年の町村合併により1町3村が久万高原町となり、森林組合、町、県が一体となって、久万林業活性化プロジェクトを立ち上げ、提案型集約施策により森林整備面積と木材生産量の実績を年々伸ばしているところです。

2. 私たちの組織について

終戦後から昭和30年代にかけての植林ブームでは、とにかく山に木を植えることが第1で、品種を選ぶことやその後の手入れのことなど考えられていない時代でした。昭和44年に、いわゆる久万材のブランドを確立するための技術指針である「上浮穴地方育林技術体系」が策定されたことにより、熱心な篤林家や行政機関の指導が濃密に行われ、優良柱材生産を目標として、植栽密度、枝打ち、除間伐など高度な施業技術や知識の習得に努めました。平均森林所有面積16ha余りの我々にとっては、小面積の森林から最大の収

益を上げるための合理的な方法と思い、仲間と切磋琢磨しながら取り組みました。この頃に地区ごとに順次、単位林研グループが設立されていきました。

美川地区林研グループ協議会は、昭和55年に旧美川村内の単位林研グループで組織され、現在では、次に示す活動方針の下、意欲的な会員を中心に活動を続けています。

3. 3つの活動方針と最近の活動状況

発足当時は、会員も若く、木材価格も現在に比べれば良く、夢がありました。1億円林業を目標にしていた時期もありました。小面積の森林からでも高い収益を上げられるよう、まず、自分たちのために、高度な育林技術の習得と実践に積極的に取り組んできました。

また、最近では、自ら林業会社を起業し、地域の若者を雇用するとともに高性能林業機械を用いた生産効率のよい間伐を行い、地域のために積極的に森林整備を進めている会員も現れました。

林研活動のおかげで、各会員の森林も一通りの施業が終わり、余裕もできたことから、林業に関する技術や知識を若い世代に伝承するため、地元の小学生を対象に森林や林業を好きになってもらおうと、林業体験教室を10年以上にわたって実施してきました。

これら3つの活動方針に基づく、最近の活動状況を紹介します。

(1) 高度な育林技術の習得と実践(自分たちのために)

個々の林業経営を安定させるために、小面積林分からできるだけ多くの収益を上げようと、付加価値の高い木材づくりを目指し、植林から枝打ち、間伐に至るまで綿密に計画された育林技術体系に基づく集約施業に取り組みました。

その結果、ヒノキ樹齢38年生、ha当たり1,500本成立、枝打ち高7m、3m無節材2玉取り(一部6m通柱)可能な林分(=育林技術体系が目指した林分)を各会員が少なからず造成しています。

また、昭和60年頃から不要な労力をかけない山づくりを考え、優良品種の選抜により地元品種の上光2号、上光7号、ヒワダ、東山などを使った挿し木

造林にも取り組んできました。

残念ながら、木材の需要構造が変わってしまった現在では、思うようには販売できませんが、手入れが完了し、日々育っている森林をみると、まだまだこれからだという気持ちに変わりはありません。

(2) 効率的な作業システムによる集団間伐の推進（地域のために）

平成20年に当協議会会員が林業事業体を起業し、雇用者数7名（平均年齢38歳）、ハーベスタ1台、グラップル3台、フォワーダ3台、ザウルスロボ1台、バックホウ1台を装備して、23年度実績で搬出間伐面積80ha、木材生産材積6,900m³、作業道開設31km、1人1日当たり6m³の生産性を上げており、地元美川地区の森林整備はもとより町内全域にその活動範囲を広げています。

当協議会においても、森林整備、特に間伐の適期実施について、一般森林所有者への普及啓蒙を行い、潜在的事業地の発掘に努めています。

(3) 地域の青少年に対する林業体験教室（次世代のために）

久万高原町は、もともと林業の町であり、森林組合や林業事業体に就業している人は地元出身者が多く、自伐林家といわれる人も多数存在しています。しかし、その子弟はといえば、他の職業に就く場合が多いのが現状です。

美川地区では、小学校で林業体験教室、中学校で自然体験学習（林業普及指導員が担当）、高校で林業インターンシップ（県林研、郡林研が担当）というように、児童・生徒の成長に併せて森林・林業に関する技術や知識を体験させるプログラムが行われています。我々の林研グループは、地元の2つの小学校の5、6年生を受け持ち、植林、挿し木、シイタケ栽培、ヒラタケ栽培、木工、炭焼きなど、「楽しく、おもしろい林業」を実感してもらえるよう10年以上継続して実施しています。

4. グループ活動の課題とこれからのこと

町村合併後7年が経ち、林研グループ組織についても旧町村単位に設けられていた協議会を発展的に解散し、郡林研のもとに単位林研が結集する形へと簡素化されました。活動の範囲も町内全域へと広がることになりましたが、 会員の高齢化と減少 手入れ済み優良原木の活用方法 木材価格

の低迷 偏った林分構造をどうするかなど、解決すべき課題がたくさんあります。

幸い、久万高原町では、小中学校や美術館等の公共施設の木造化がひととおり完成したことから次の段階として、久万材を使用した地産地消住宅の建設促進を図ることを目的に、町内の建築業者、製材業者、林家等で「久万材の家づくり推進協議会」が結成され、3年間の協議を経て、24年3月に久万材100%の「久万高原の家モデル住宅」をオープンさせたところです。

今後、これらの施設を活用してもらいながら、まずは、我々会員が育ててきた木材が、住宅をはじめとして、一般の方々の役に立つように、手入れ済み優良原木の活用方法について検討していきたいと思います。